

既存資源を活用したビジネスによる

地域活性化の可能性に関する調査研究

～高知県土佐町 株式会社Kハウスを例に～

1130469 西森 梓

高知工科大学マネジメント学部

1. はじめに

高知県の中山間地域にある人口4,000人のまち土佐町は85%が森林におおわれており、「人口減」「高齢化」「雇用難」を抱えている。農業だけではやっていけず、新規事業を起こそうとするも振るわずの地域。そこで、関西から高知にUターンしてきた、現在株式会社Kハウスの社長である川村幸雄さんが間伐された嶺北スギに着目した。家を建築するためには少々長さが足りないほどの木材である。端材だが良質な木材であるため、それらを使ってオーダーメイドの犬小屋づくりを発案した。市場は地方ではなく都心部。首都圏を中心に注文が増え、一定レベルの成果をあげている。しかし、丈夫な嶺北スギは壊れにくく、リピート率が低いため、新たな事業を模索する。

2. 背景

人口4000人、高齢化率43%。若者は、都心や高知市内に移り住み、帰ってきてもやりがいのある仕事はなかなか見つからない。このような過疎や少子高齢化問題は、土佐町だけでなく全国各地の地域で問題視されている。この状況が抑制される傾向はなく、問題は段々と深刻化していく。このような地域では何か事業を起こそうと思っても、資金面や人材面での壁が分厚く、実現は厳しいとされ、単発的な地域活性化を図っても、すぐに元に戻ってしまう。問題を解決へと導くためには、できる限り持続可能で無理のない地域活性化を図る必要がある。

3. 目的

本調査研究で取り上げる株式会社Kハウスは地元の資材、大工さんで事業を發展させている。これまでの成功要因を含め、さらに事業を拡大することによって、いかに地

産地消、雇用促進、地域産業への波及効果が生まれるか、所謂地域の活性化につながるかを検討考察し、同じ悩みを抱える他地域での事業發展、地域活性化に取り組むきっかけの一つとなる様な要因を引き出すことを本稿の目的とする。

4. 研究方法

本稿では、事例として取り上げる株式会社Kハウスにおいて、起業から事業展開へのプロセスや成功要因などを公表資料や社長へのヒアリング、現地調査から検証をしている。また、現地調査では一定期間滞在して地域の現状を肌で感じるとともに、新規事業への取り組みに参加し、自分も実際に作業をしながら現場の人や地域の方々に聞き取り調査を行い、検討考察を重ねていく。

5. 結果

オーダーメイドの犬小屋事業で活用されている地域資源は、建築には向いていない嶺北スギの端材だけでない。組み立ての際に必要な金具(扉取り付け時に必要な蝶番やビスなど)、ネームプレート(表札)など、材木以外の物も地元企業に発注しており、犬小屋事業によって存続しているといっても過言ではないほどの波及効果が生まれている所もある。

また、大工さんも地元に住んでいる方を雇用している。この地域に住む人にとって、仕事場に家から通えるというのはとても有難いことだと言う。この仕事が無ければ、高知市内まで仕事を探しに行かなければならないという言葉も耳にした。中には、農家と両立しているという方もおり、稲刈りの時期は大工の仕事を休むという仕事スタイル

も確立できている。

新規事業の取り組みである、「犬と一緒に食べられる野菜クッキー」事業では、まず製造を地元のNPO法人のパン屋に委託する。そこでは、ハンディキャップを持った方を雇用しており、製造工程が簡易的になれば雇用促進にもつながる。また、材料である米粉や野菜も地元で採れたものを使用することにより、地産地消の効果をもたらす。

犬小屋・野菜クッキーともに、完成品こそ、地産地消とはならないが、地産外産ならばなお良い。「土佐町」という地名に興味を持ってもらう良い機会となる。

6. 考察

「資源」という言葉には幅広い意味合いがあり、本稿で取り上げたものは、主に天然資源、人的資源である。中山間の「田舎」には、森林、畑、田んぼなどと天然資源が溢れている。そして、自分たちの力で地域を盛り上げようとする地域住民の方々は、立派な人的資源である。それは、現場と一緒に作業を行っていて感じるものがあつた。また、行動を起こしているのは大人たちだけでなく、地元の中学生も他地域の人に土佐町の事を知ってもらおうとPR活動に真剣に取り組んでいる。地域がこれほど一体となって取り組んでいることには魅力があり、地域住民の方々の意志もまた資源であると考ええる。

これらの資源は、どこから取り寄せたわけでもなく、全てこの町にあつたものである。強いて言うならば、川村社長がUターンをしてくる前に関西で働いていた頃に培つたノウハウくらいである。既存の資源から地域ビジネスが生成し、発展していく。それによって地域が求めるものは、経済効果ではなく、「活力」だと私は考える。そして、人々が活力を感じるにより、それはやがて生きがいへとつながっていく、と考えている。

7. 提案

考察でも触れたように、本調査研究を進めるにあたって、地域活性化のキーワードは「活力」だという所にたどり着いた。人々に活力を与えるものは地域ビジネスにとどまらないが、これを一つの例として既存資源と活力の相乗効果を創っていく事ができれば理想的である。

また、地域の将来を担う地元の中学生などには、他地域にも目を向け、その上で、改めて自分たちの地域にある貴

重な資源に気付いてほしい。そして、活力の源となる仕事を創りだしていくことが地域活性化に必要な不可欠な要素だと考える。

【参考文献】

[1]犬小屋製作工房Kホームページ

URL: <http://www.inugoyak.com/>

[2]高知県庁ホームページ

URL: <http://www.pref.kochi.lg.jp/>

[3]土佐町公式ホームページ

URL: <http://www.town.tosa.kochi.jp/>

【謝辞】

本研究に関して、株式会社Kハウスの川村幸雄社長には、現地調査、インタビュー等にご協力頂きました。また、NPO法人れいほくの里どんぐりの小笠原知恵様およびスタッフの皆様には、製造現場でもお世話になり、大変有益なアドバイスも頂きました。記して感謝の意を表します。